

# 第三部

## 比<sup>て</sup>べて初めて見える世界



奥深い「白い象のような山並」  
～まだまだある読み方～



# ヘミングウェイの巧みな表現と見え隠れする女の心の揺れ動き

## —「白い象のような山並」を読んで—

村井 彩華 (むらい・あやか)

エプロ川の平野を挟んだ山々は長くて白かった。こちら側には日蔭も木々もなく、駅は二本の線路に挟まれて、日なたにあった。駅の側面にぴったりとくっついて、駅舎のあたたかな日蔭があり、竹のビーズをつないだカーテンが、ハエ除けのために酒場の開いた戸口にぶらさがっていた。

このような描写から始まるヘミングウェイの短篇小説、「白い象のような山並」。書き出しに景色をもってくることは小説の技法としてよくありがちであるが、ヘミングウェイはこのたった3行にもこれから登場する男女の関係、感情をうまく当て込んでいるように思える。

駅の様子を表している場面で、「日蔭も木々もなく」「日なたにあった」という言葉からは“明 (bright)”の描写を、同じ場面で、「日蔭があり」という言葉からは“暗 (dark)”の描写を。終始、男の言い分は女に中絶手術を受けさせたいこと。きわめて、単純明快だ。男を明 (bright) に例えるとするならば、女は暗 (dark) であると言えよう。ここで単に「日蔭」という言葉だけなら、女は全く中絶を望んでいないという男と女の言い分は明暗ははっきり分かれて、明らかな対比が伺えたであろうが、ここでは「あたたかな日蔭」という言葉が用いられている。灼熱の太陽が照り付ける暑い (hot) 場所であれば、日蔭は清涼な場所である。だが寒く (cold) 感じるはずの日蔭があたたかい。「あたたかな」という言葉は、暑い (hot) と寒い (cold) の中間であるとは言えない。暑い (hot) よりの影響を強く受けた感じ方である。bright や hot を男の言い分を表す暖色系と考えると、dark や cold は女の言い分を表す寒色系である。中絶をしなければこれまで築いてきた男との関係が崩れて去ってしまう。そのような気持ちに締め付けられ、中絶を勧める男の主張を反映する暖色系の感情が彼女の心を強く揺さぶり、そちら側に傾いた表現である「あたたかな日蔭」という言葉が用いられているのだと考える。

そして先程と同じ場面の文に後続する「竹のビーズをつないだカーテン」という言葉。私は「竹のビーズをつないだカーテン」と言われても、どのような物かイメージできなかった。そこでインターネットで画像を検索してみると、一つ一つが結ばれてつなげられたものや、タコ糸やひもでビーズが単に通されたものが列をなしているものもあった。ヘミングウェイはどのタイプのものをイメージして描いたかは分からないが、私は一読者としてビーズが単に通されたものではないかと思いイメージした。そのカーテンに、はさみを入れると、つまりは亀裂が入るとすべての竹のビーズが一瞬にして床に落ちてしまう。そのような「脆さを孕んだカーテン」が、ある時は彼女の揺れる心の動きを、またある時は彼女の張りつめた心の様子を表しているように思えたからだ。

女が遠くの山並を見て、山肌を白い象のようだと言った場面で、「生あたたかな風が吹き付け、ビーズのカーテンがテーブルにぶつかった」という表現がある。白い象のように見えるという女の話の打ち切るかのように風が流れカーテンに当たるのだ。その風もまたもや生あたたかい。男の意向を汲んだかのような風が赤ん坊に向いていた女の神経を呼び戻し、男と飲んでいるビールの話に向ける。そして次のセリフ、“It's lovely” 女の心がゆるんだことが見て取れる。風になびき揺れたビーズ

のカーテンが、男のセリフにより彼の方へと戻る彼女の心の動きを表しているのではないかと感じた。

その後、男の「一緒に行って、ずっとそばにいてやるよ。ちょっと空気を入れて、それで何もかも完全に元通りさ」「だって他には何も問題はないだろう。俺たちが困っているのはたった一つ、そのせいなのだから」と男と女が赤ん坊という言葉は伏せたままではあるが話が本題に入った場面で、「女はビーズのカーテンを見て手を伸ばし、カーテンのうち二本をぎゅっとにぎった」という文に出くわす。男に理解されない苦々しさ、悔しさがこみ上げるなか、子供を産む、男との関係を続ける、という男か子供か、その二つの選択肢が二本のビーズのカーテンに投影されているのではと考え、その間で女は悩んでいるのではと思った。その後の場面は「君のためならなんだってするよ」という男の言葉にもういい加減にしてと言わんばかりに **please** を七回も連呼して男に話をやめさせる。彼女のいっぱいいっぱいの気持ちが読者にひしひしと伝わってくる。彼女の心は男か子供で揺れ動き、ピンと張った弦のような一面も見せている。

そしてそのあと、カーテンに関する描写は、先程の彼女の心の中がいっぱいいっぱいになった場面の「女はカーテンをくぐり出てくると」と、男が駅の反対側に鞆を運び、戻った際酒場でアニスを飲み終えた場面の「男はカーテンをくぐって出てきた」その2行のみである。男の何も本質的なことをわかっていないうわべだけの優しい言葉に情けなくなり、自ら自分の揺れる気持ちに終止符を打ち、女は先にカーテンをくぐり抜ける。そして男がカーテンをくぐり抜けた先に待っていたのは、彼女の微笑み。最後にカーテンの揺れが収まったときには、彼女は微笑んでいたのである。彼女は心の整理がついたのであることが読み取れる。最後の行“I feel fine”この行からは彼女の落ち着き、そしてたくましさまで伝わってくる。

ここまで見てきて、この小説はセリフから男女の関係や女の心の揺れ動きを読み取ることはもちろん可能である。しかし、明暗や暑い寒いという対比に気付き、そのうえで「あたたかい」という言葉の位置付けを考える。そのように一つ一つの言葉に注意を払うことで、その場面を深く理解できる。また、風景の一描写としての竹のビーズのカーテンという小道具にも視点を向けることで、わたしたち読者は視覚や聴覚そして触覚も刺激を受け、この短い小説をいきいきとした物語として味わうことも可能になる。それぞれの場面ごとの温度や湿度、質感などをまるでその場面に居合わせたかのごとく身をもって体験させてくれるわけだ。最後に鳥瞰してみると、このように臨場感を与えてくれるこの小説は細部まで神経の行き届いたすばらしい作品だったと痛感した。

## 「白い象のような山並」を読んで

— ジグは詐欺師なのか —

森 大地 (もり・だいち)

私が「白い象のような山並」を読んで、何よりもまず疑問に思ったのはタイトルである。はたして登場人物の女の子ジグは会話にもあったように本当に山並みが白い象に見えたのだろうか。そんなわけはないと思う。

少なくともわれわれ日本人の感覚では、山並みが白い象のように見えると言われても、共感できる人は少ないと思う。では、どうしてそのような例えを使ったのだろうか。

この [white elephant] の意味の一つに [無用の長物] という意味があった。作品を読みながら、いったい何が無用の長物として扱われているのだろうと考えた。妊娠中絶の話から、胎児の事だと思った。ジグは何度も「白い象 (無用の長物) のようね。」というセリフを言ったが、もちろん表面上は、[山並みが白い象のように見える] という意味だが、その裏で [(胎児は) 無用の長物のようね] という意図を持って発言しているのだと分かった。

もう一つ、女の子 [ジグ] を調べてみるとスラングだが [詐欺師] といった意味があると分かった。ここから推測するに、女の子が何か嘘をついて男を騙しているということになる。何を騙しているのか、最初は妊娠それ自体が嘘なのかと疑ったが、私はこう考えた。実はこの子供の本当の父親はまた別の男なのではないかと。わざと中絶を反対して、男と別れる口実を作っているのではないかと。

ただ単に作品を読み進めていくと、中絶しろと言っている男に悪印象を持ち、女の子に同情の念を抱くだけだが、このように単語の意味を調べ詳しく考察を加えてみると全く逆の印象を持った。女の子の過去に何があったのか推測の域を出ることはできないが、想像をしていくにつれてこの女の子はこの男の親友と関係を持ち、一刻も早くこの男と別れたいと思っているのかもしれない、はたまた生活のために仕方なく身売り誰のともわからない子供を授かったのか等と、数多くの背景を頭の中に見てしまう。

物語は最終的には作者ではなく読者が作っていくものだと私は感じた。今回の作品のように、作者の意図や人名、地名などの背景を探りながら自分の想像を膨らませて読んでいきたいと思った。

## “Hills Like White Elephants” を読んで

車 健太郎（くるま・けんたろう）

私は英語圏の短篇小説をこれまで生きてきた中で読む機会がなかった。そこで、日本人としての視点からこの“Hills like White Elephants”を読んだ見解を書き記したいと思う。

まず個人的にたとえ短篇小説だとしてもある程度の人物背景（年齢など）が書かれている印象を持っているが、この物語に関しては人物背景の描写がほとんどなく、どのような人物かという判断を読み手にゆだねている、ということが興味深い点である。

「男」、「女」、女の名前は **Jig**、ということが書かれている以外はほぼ人物に関する描写はゼロとあっていい。二人の将来のことを考え、中絶を女に自分の意思でさせたい男と、逆に二人の将来を考え子供を生もうとする女という見解が最も一般的であるように私には思えるが、そのほかにもさまざまに受けとることができる、ということがまずはじめに興味深い点である。

次に、人物背景に関する描写が少ないかわりに何が多いのかということを見ていくと、もちろん会話が多いのであるが、その会話の節々に人物の動作が織り交ぜられているところに目がいく。

たとえば、‘**The girl looked at the bead curtain, put her hand out and took hold of two of the strings of beads.**’のように動作に関する描写がこと細やかに多く出てくる。なぜここまで細かく、さらに頻度も多いのかということに目を向けると、人物背景の描写が少ない、ということに共通しているのではないかという見解に私はいたった。どのような人物かということを描写するのではなく、会話の流れ、会話中の言葉の言い回し、また登場人物が呑んでいるもの、こと細やかな動作、そして会話が繰り広げられている場所、会話と直接的に関係のない部分での描写という点が非常に目立った。このようにさまざまな部分からこの物語の真理に迫るということがこの物語を読む上で難しくかつ面白いことなのではないかと私は思った。

また、登場人物が一切相手の言うことを耳に入れないという点にも目がいった。話し合いというよりは一方的に自分の意見を述べて聞き入れてもらおうとしている点が、私の強い外国的な感じがするな、と感じた。

二人の会話、そしてさまざまな動作の描写からまるで自分がその会話を眺めているかのような錯覚に導くこの作品はすばらしいなと思った。

## 会話の中にみる男女の心とその技法

— “Hills Like White Elephants”を読んで —

奥山 真帆（おくやま・まほ）

「白い象のような山並」は、場所や景色に関する描写は多いものの、人物に関する描写がかなり少ないことが大きな特徴です。そうすることによって、読者の想像力に多くを委ね、この作品に幅を持たせているのではないかと思います。ここで私が注目したのは女の心の動きです。

この作品は、基本的に男と女の会話で進行しています。はじめは「何か飲む？」という何気ない会話から始まり、最終的には中絶（the operation）という2人の間にある核心的な問題へ触れていくこととなります。その過程で、「あらゆるものがリコリスの味なのよ。とくにあなたがずっと求めてきたものはすべてそうなのよ、アブサンのように。」という女のセリフがあります。これは、男と女の酒を飲みながらの何気ない会話の一部です。まだ中絶が話題になっているわけではありませんが、女はこの言葉に自分の心情をちらつかせ、私たちは意味深な印象を受けます。このことから、この時すでに女は中絶のことで頭がいっぱいだったのではないかと、さらに言うともっと前からそうだったのではないかと私は感じました。

そしてその後、初めて **Jig** という女の名が明記されます。そこで同時に、女の名だけでなく中絶いう今までぼやかされてきた2人の問題もまた、具体的に言葉で示されています。「それはひどく簡単な手術なんだよ、ジグ。」というこの1つの男のセリフが、読者を物語の核心へ導く重要な鍵となっていることがわかります。

そして2人の話題がはっきりと中絶に及んでからというもの、男は中絶して子どもを持つ、持たないということには触れず、手術の一種として中絶を捉え、話しているよう感じます。それに対して女は、中絶手術に対する心配などなく、男との子どもがほしいという気持ち、それだけがうかがえます。この口論は、女の、子どもを持ちたいという気持ちに気付かない男と、理解してもらえない女のいらだちが合わさってのものだと考えられます。私はそれに加えて、はっきりと「子どもがほしくない」という気持ちがあるにも関わらず、そこになかなか言及しない男、さらに言うと、そんな男が言及を避けようと彼女を気遣っているようなことばかり言い、中核的な部分に触れないようにしていることが、女にははじめから分かっている、余計に腹立たしかったのではないかと、それゆえにこのような会話に発展したのではないかと、思います。

二人の会話から、お互いに今までどおりの恋人としての関係を保っていきたいと思っている反面、子どもに対するお互いの交わることのない気持ちは、言葉にせずとも、実は十分に理解しあっていたのであろう、と私は考えます。もし相手が自分とは反対の意見を持っていることに気づいていなかったとしたら、はじめからまっすぐな言葉でぶつかりあっていたはずではないでしょうか。そして、最後の“I feel fine.”という女のセリフには、今まで触れないようにしてきた中絶に対するほんとうの気持ちや考えを、男がはっきりと言葉に出したことに對する少し清々しい気持ちが表れたセリフなのではないかと、思います。また、ほんとうの意味で二人が歩み寄り、進んでゆくスタートを暗示しているのではないのでしょうか。

## 「白い象のような山並」における場所の考察

前田 賢吾（まえだ・けんご）

この小説の本題は男と女が中絶をするのかしないのかで言い争っている部分です。僕はその争っている内容と争っている場所の関連性に目を付けました。

**The hills across the valley of the Ebro were long and white. On this side there was no shade and no trees and the station was between two lines of rails in the sun.** と p60 の一行目にあります。この部分から読み取れるのは、駅のある片側は木も日陰も全くない場所であるということです。木は生命を象徴するものであるという解釈を行いました。すると、駅の片側は木が全くない。生命を象徴するものが全くない。つまり、男の主張する中絶というものを表していると思いました。

一方、p63 に **Across, on the other side, were fields of grain and trees along the banks of the Ebro.** とあります。駅の片側は、木が全くありませんでしたが、もう片側は、エbro川に沿って穀物畑や木が生い茂っています。上記のように、木というものは生命を象徴しています。よって、こちら側は生命を象徴するものが生い茂っている。つまり、中絶をせずに赤ちゃんを産むということを表していると思いました。

そして、この駅の位置というものは、生命を象徴するものが全くない場所と生命を象徴するものが生い茂っている場所の間に位置していることがわかります。さらに、その駅で中絶の話をしているのだから、この背景の設定は作者によって、意図的になされたものと思われます。それを裏付けるものとして、p65 に **He looked up the tracks but could not see the train.** とあります。電車というものは必ず目的地というものがああります。そして、この中絶を象徴する場所と赤ちゃんを産むことを象徴する場所の間の駅で電車が見えなかった。これは、ただ電車が来なかっただけでなく、二人の中絶に関する話し合いの終着点が見えないことが、電車が来なかったことにより象徴されていると思ひ、また作者は意図的にこのような内容を文章に記したのかなと思いました。



## ヘミングウェイの味

橋本 共平 (はしもと・きょうへい)

アーネスト・ヘミングウェイの“Hills Like White Elephants”はスペインが舞台の短篇小説である。この作品を読んで感じたことについていくつか述べたいと思う。

はじめに、男と女の会話から男と女の価値観の違いを表しているように思えた。二人がどこにいるのかとその情景についての描写はみられるし、特別少ないということもないが、二人の性格や見た目も含めて登場人物についての描写と説明は多くないように思われる。特に、この二人に起きた出来事、すなわち妊娠と中絶についての考え方については人生観と価値観については、それがこの物語の非常に重要で大きな要素であるが、しっかりと書かれているようには感じ取れなかった。むしろ、その要素の読みとり方についてはヘミングウェイがダイアログの形のなかに二人の性格や思惑を暗示するようにして、読者側の受け取り方に任せていると思った。物語の終わりは汽車の到着の時間だが、結局二人がどのような決断をしたかをヘミングウェイは明記していない、ここもまた読者の受け取り方に完全にではないが委ねたのかと思われる。

読み進めていくと、男女が頭を悩ませていることが中絶についてだと判明するのだが、男は出産を望んでおらず、中絶が大したことではなく中絶を行えば二人の関係がまた順調に進み始めるのだからそっちのほうが適当だろうというが、いまひとつ女を納得させることはできない。女はすんなりと男の提案を受け入れようとはしない。途中までは納得できる説明を求めているように見えるが、物語の後半では“I don't care about me.”と言って男に歯向かうもしくは二人が抱えている自分のおなかにいる子供についての問題に開き直るような態度を見せる。酒場でのやりとりから男女の感情の機微を感じ取ることができる。

最後に、この“Hills Like White Elephants”全体の雰囲気というか作品の特徴ともいえるだろうか、会話が多く描写はさほど多くないことは、上でもふれたが、会話の内容やその間に挟まっている描写これがそれぞれ一見とるに足りないように感じる。たとえば、細かいお酒の銘柄について言い合っているシーンや、酒場のインテリアについて竹のビーズでできたカーテンなどである。短篇であるから、情景描写があまりに多いとそれだけの文章になってしまうが、ヘミングウェイのこの作品もなんだかそれに近いものを感じるのだ、しかし私が思うのはそれこそがこの作品の味なのではないかというところだ。読者の受け取り方に任せるように書かれているのと同時に、細かい部分の描写が点在することで一瞬その場においてそれを見ているかのように感じさせたり、そのような効果が短い文章の中に織り交ぜられていることによりそのような効果があるのではないかと考え、それをこの作品の味とらえたことを述べて私のこの文章のまとめとする。

映画『ジェイン・エア』(1996)と  
『ジェーン・エア』(2011)を観くらべて



## ジェーン・エアに魅せられて

### — エアの価値観そして女優の演技から彼女の生き様に迫る —

村井 彩華 (むらい・あやか)

『ジェーン・エア』の最新作である2011年版の映画を授業中に観終わった時、最初に感じたことは、1996年版の映画とは違い、ロチェスターとエアの恋模様が如実に表れすぎているのではないかというものであった。若者が文学作品を毛嫌いしないよう現代的に描いているのかと思った。しかし、幾度も『ジェーン・エア』は俳優を変え作り直され放映されてきたのだから、制作者はかなりの趣向を凝らしているに違いないと考え、原作の小説を読みそして映画を見直した。一回目ただ単に受動的に見ていた時には感じなかったさまざまなものが見えてきた。映画に登場するセリフや風景描写や衣装や小道具、すべてにおいてだ。この2011年版の映画には小説で散りばめられているすべての要素が詰め込まれているのに、誰が見てもわかりやすいタッチで描かれていることがわかった。小説と2011年版の映画を何度も見返したうえで私が気に入ったのはやはり映画の最後の場面である。

最初はロチェスターが高貴な身分で、エアが家庭教師という低い身分であったが、それが逆転し、エアは叔父の財産相続で裕福になり、その一方ロチェスターは火事で家を失いまた身体的な障害を負ったのである。それでも彼女は彼と一生をともにすることを願った。彼女は彼の外見などではなく彼自身の魂に惚れたわけである。映画のセリフでもあるように、この二人は魂と魂で語り合う仲なのだ。恋心などを知らずに生きてきた彼女にとって、彼との出会いは人生にこれまたとない最高の幸せだと感じていることがわかる。

「彼という存在のなかにこそ、わたしは生き、わたしのなかにこそ彼は生きるのだ。」原作の小説の中で、私にはひとときわ光って見えたこの一文が物語るように、どのような問題が待ち構えているとも、すべてを乗り越えたうえで彼のすべてを愛すという彼女の考えに私は心から感動した。幼少期から辛い経験をし、性差や世俗的な障害の多い時代を生き抜いた彼女にしかできない深い愛情の表れなのだと感じた。

また、エアの考え方を通して深く感銘を与え、彼女の生き方に見る手をうまく引き寄せさせたのは、エア演じるミア・ワシコウスカの演技だったと思う。原作の小説での映画の最後の場面に値するところでは、エアは、ロチェスターが火事で腕を失い、盲目になったことを知ったうえで屋敷に向かい、彼の様子をうかがった後、彼に会うのだ。しかし、この映画では小説のような詳細な説明はなく、使用人に彼の居場所を聞いた場面だけが写され、その後、橋を渡って彼の元へ向かうというアプローチの仕方をとっている。私はこの際のミア・ワシコウスカの演技に注目した。エアが橋を渡る際、「ロチェスターはどんな様子なのか」「彼は私を見て目を見張らせ、涙を流し引き寄せそして接吻するのだろうか」そのような淡い期待をエアは持っているのかと見る側は思い、次の描写を待ち構える。だがその一方で、彼女はすでにロチェスターの事実を知ったうえで「どんな障害があろうとも彼が私と同じことを望んでいるならば、一生をともにしよう」という気持ちを持って橋を渡っているのかもしれないという、見る側を複雑な気持ちにさせる。エアはそのような二つの解釈がとれるような、嬉しいとも悲しいとも言えない緊張した面持ちをしているのだ。見る手がどちらの解釈をしたにせよ、エアはロチェスターに会いたくて、会いたくて、抑えられなかったはずの自分の気持ちを、今彼に会う瞬間になって抑えている。これまでの経験がそうさせたエアの人間性が強く表れたところだと感じた。そして同時に彼女の人間性をうまく表現したミア・ワシコウスカの表情作りに見入ってしまった。

エアの生き方、そしてそれをうまく反映したミア・ワシコウスカの演技に魅せられた映画であった。

## 新たな女性像、ジェーン・エア

橋本 共平 (はしもと・きょうへい)

米文学演習 I では、シャーロット・ブロンテによる 1847 年の小説を映画化したフランコ・ゼフィレリ監督の作品とキャリー・ジョージ・フクナガ監督の作品を鑑賞した。ここでは、その『ジェーン・エア』について原作や書かれた時代の社会背景についても触れながら、感想を述べたいと思う。

この物語、孤児で楽な人生を歩んできたとは言えないジェーン・エアという女性が、ある名家に家庭教師として雇われ、その家の主人との関わりを描いていく物語である。恋愛を扱った小説と言えるだろうが、全体の雰囲気としてはとても暗い。単に、実らない恋が哀愁を漂わせ暗いというだけでなく、ジェーンと主人・ロチェスターとのすんなりいかない関係はもちろんだが、ジェーンの育った環境、境遇またそれにより生み出されたジェーンの人格や雰囲気がこの作品を重く暗いトーンにしていると感じた。ジェーンは聡明な家庭教師として描かれているが、私は彼女の性格については、「お堅い」と表現してもいいぐらいまでのものを感じた（このジェーンのような女性像がこの作品のインパクトになるようだが…）、もちろん人間味がないというわけではない、ロチェスターに愛情を抱き、涙したりと、感情をあらわにする場面はあるが、それでも彼女の芯に意志の強さがあるのだろうということも思った、ジェーンをそのような人間にしたのは間違いなく彼女の少女時代の経験であろう。孤児として引き取ってもらった家での扱いの酷さや、その後入るローウズの悪い環境と厳しい教育、気を許しあった友の死、幼い少女にとって壮絶であったはずだ。

ここで、この作品がつけられた時代を見てみると、イギリスはビクトリア朝、家父長制の考えが強まり、女性は男性に従属するものであるという風潮があったという。そういう時代に、描かれたヒロイン・ジェーンが男性に従属的な女性に映るかと言われればそうではない。資産のある家に使用人、家庭教師として雇われた身ながらその主人と自由恋愛をしていくのだ。作者のシャーロット・ブロンテがこの作品の発表に男性のペンネームを使っているというから、女性の立場・地位は高くはなかったのだろう、そしてシャーロット・ブロンテはジェーンにこれからの女性像、社会に歯向かうという言い過ぎかもしれないが、男性に付随するもの程度の女性ではなく、新たな女性像の希望をジェーンに投影した願ったのではないだろうか。時代背景を知り、私はそのようなメッセージを感じ取った。

さて、映画についてだが、二作品を振り返り比較すると、キャリー・ジョージ・フクナガの方が景色、音楽がとても美しく鮮明に印象に残っている。一方で、フランコ・ゼフィレリの方には、キャスティングが良いと思った、あくまで私個人の主観的な感想であるが、容姿や仕草がジェーン、ロチェスター、その他の登場人物を演じる役者はとてもマッチしていると感じた。

以上が、私が『ジェーン・エア』を見て、また調べて、感じたことや読み取りを自由にまとめて述べたいところである。

## ジェーン・エアを見た私の見解

車 健太郎（くるま・けんたろう）

1996年製作のものと2011年制作のもの二作品を私たちは講義中に見せたいいただいたわけだが、私は素直に2011年製作のものの方が1996年製作、シャルロット・ゲンズブール主演のものよりも面白かったように感じた。二作品の比較からそう考えた理由を述べたいと思う。

まず第一に、映像技術のみならず、そのほかのさまざまな技術発展により、表現技法、演出技術が優れていたのは2011年製作のものである。例を挙げてみると、ジェーンがロチェスターとの結婚式の際に狂人の妻の存在を知り、衝撃を受け一人でソーンフィールド邸から逃げ出す場面で、かなり遠くの視点からジェーンが逃げ出す様子、またソーンフィールド邸がどのような場所に聳え立っているかを連想させるような広大な自然をうつしだしたり、逃げている途中で絶望に打ちひしがれているジェーンが激しい雨に打たれていたり、とさまざまな場面で技術の進歩を感じた。一方1996年製作のものとはところどころ安っぽい演出があったように思われる。例を挙げると、ロチェスターの妻が死ぬ場面や、ロチェスターの寝室に火がつけられる場面などとりわけ「火」が用いられている場面で安っぽさを感じた。この点がまず私が2011年製作のものがよりよいと考える一因である。

二番目に、2011年のものは過去回想の形式で物語が始まる点がよいと思った。これは個人の好みになってしまうかもしれないのだが、私は過去回想の形式が非常にいい方法であると考えている。2011年のものではジェーンが雨に打たれ嘆いているシーンから映画が始まるわけであるが、最初に見た人々はなぜジェーンが泣いているのかわからない。この、「わからない」といった感情を抱かせるのが過去回想の形式の大きな武器であるといえる。過去にこの形式を用いていて面白くなかった映画は今まで見た中ではなかったように思える。たとえば、『インセプション』もその映画のひとつである。映画の形式という点から見ても、2011年のほうがよりよいと私は考える。

最後に、演者の演技力についてである。これに関して、素人の私はどうこう言える立場ではないが、2011年のほうが優れていたと思う。現代社会とはまったく違う時代背景を持つ映画のため、演じるのが非常に難しかったように思えるが、そのようなことを微塵も感じさせない演技だったと私は思う。

以上三つの理由が私が1996年製作のものよりも、2011年製作のものの方が優れていると考える理由である。

## ジェーンの味わった冷酷さとホラー的要素

前田 賢吾（まえだ・けんご）

まずこの映画を見て思ったのは、身分の低い者と身分の高いものとの恋物語の中に冷酷さ、ホラー的要素が含まれている映画だなと思いました。冷酷さに注目したのは、ジェーンの子供の頃のシーンがすごく頭に残っているからです。ジェーンが幼かった頃は冷酷なシーンばかりだったと思います。ホラー的要素に注目したのは、ホラー映画でもないのに屋敷の中で幽霊のような不気味な笑い声がする場面や、バーサの設定に気になったからです。

冷酷さを感じた場面は、まずジェーンが子供の頃、リード夫人のジェーンに対する態度にすごく冷酷さを感じました。そしてもう一つは、これもまたジェーンがまた子供の頃のことで、ローウッド寄宿学校に入れられた時のことであつた。その学校は規則がとても厳しく、校長からは髪を切り落とされるなどとてもひどい扱いを受けることとなる。そして突如、友人のヘレンの体調が悪化し、ある日突然死んでしまう。ジェーンの大親友であるヘレンが亡くなりジェーンが悲しむ場面は非常に悲しい。さらに、その亡くなったヘレンに対し、全く慈悲を払う様子を見せないローウッドの校長にはとても冷酷さを感じた。このように、ジェーンが子供の頃は、冷酷な内容がよく見受けられました。これは、ジェーンが大人になり、最後ロチェスターと結婚して幸せであることを幼少期に冷酷な内容を詰めることによってより際立たせているのかと思いました。また、ロチェスターも過去に辛い体験をして誰にも心を開かなくなったとありましたが、同じく冷酷な体験を経験してきたジェーンだからこそ、冷酷な体験を経験した者同士恋に落ちたのかとも思われました。

ホラー的要素を感じたところは、上記のように屋敷の中で不気味な笑い声がする場面や、バーサの存在であつた。なぜこんな要素を組み込んだのか気になったので、個人的な解釈を入れてみました。まず、屋敷のある場所が、周りは自然だらけの人里離れた場所で、さらに屋敷は建てられたばかりの綺麗なものというよりはずっと昔からある古い建物である。このような場所、建物だからホラー的要素を取り入れたのだと思いました。都会の真ん中の綺麗な建物という設定だとこのような要素は取り入れないと思いました。一つの人里離れた、古びた屋敷に貴人（ロチェスター）、美人（ジェーン）怪人（バーサ）幽霊（不気味な笑い声をあげるのはロチェスターによるとグレース）といった様々なものを住ませることで、物語に面白味が出てくると思いました。

このように、恋愛物語だからといって、恋に落ちていく場面などメインの部分となるところだけを注目するのではなくて、あえてサブとなる部分や物語の設定を自分で自分自身の考察をいれるととても面白味が倍増することがわかりました。このホラー的要素の考察をした後にもう一度この『ジェーン・エア』を見てみるともっと面白さが理解できるのかと思いました。

## 歴史的背景から見る異端のヒロイン・エア

— 『ジェーン・エア』を見て —

奥山 真帆 (おくやま・まほ)

私はこの映画を見て、エアの芯の強さにとても惹かれました。彼女の芯の強さには、幼少期の孤児院でのつらい生活も大きく影響しているのだと思いますが、孤児院に預けられる以前から、自分を殺して周りに媚びたりせず、はっきり自己主張する姿が多く見られました。私自身、エアのような立場ならきっと自分を偽って、身を守ることを優先してしまうだろうし、エアのように、自分の思っていることを自信たっぷりに口にするなど到底出来ないだろうと思います。

このようにエアに対して「自立した」「強い」印象を受けたのですが、彼女のこういった部分は当時ではかなり異端でした。というのも、『ジェーン・エア』が書かれた頃のイギリスは、女性への偏見がかなり強い時代であったのです。著者であるシャーロット・ブロンテが、女性であるにも関わらず、カラーベルという男性のペンネームを使って作品を発表していたことや、同時代に活躍していたメアリー・アン・エバンスもジョージ・エリオットという男性のペンネームを使っていたことから、そのことがうかがえます。そんな時代の中で、主人公エアは男女平等という反骨精神を持ち、財産や身分にとらわれない、当時には全く新しい女性像として描かれたのです。

結婚について見ても、ロチェスター氏にはエアから告白していましたが、これも当時の女性としてはかなり異端なことで、シャーロットが意図して新しい女性像を提示しているのではないかと、思います。また身分という観点からみると、ロチェスター氏が視力を失ってしまったことで初めて、2人のあいだにあった身分という大きな障害を越えることができ、それゆえに二人は結ばれることになったのです。結婚して一生を共にしていくには、お互いが対等な立場で支え合えることの大切さを考えさせられました。

全体を俯瞰してみて、目の前の利益や周りの目などを気にすることなく、自分の気持ちに正直に生きたエア、そして財産や身分でなく愛を選んだエアはすごくかっこよく、自分自身もまたエアのように、自分の気持ちに素直に行動出来る人になりたいと思いました。エアは時代にも運命にも、自らの力で打ち勝った強い女性だと思います。エアという人であったから、得られた幸せだったのではないのでしょうか。エアの生きざまに、越えられない壁はないのだということを教えてもらいました。私も壁にぶつかった時には、エアの強さを思い出して頑張りたいと思います。

## 『ジェイン・エア』を見て

森 大地（もり・だいち）

この作品を見てエアやロチェスター等のこの時代における登場人物の行動の意味を考察してみた。

- 激しい感情をあらわにする。
  - →不当な扱いに対する反抗、自分を認められたいという思い、自由へのあこがれ
    - ◇ 知識や未知の世界に対するあこがれ。
- 女から求愛する。
  - →結婚：自分を金銭的な投機の対象とは考えていない、情熱や感情の一致を重視する。
- 男や社会の考えをそのまま受け入れるのではなく、自分の価値観で判断する。
  - →絶えず自己批評、自己分析を繰り返しながら成長してゆく。
- 財産や身分のもつ価値を完全には否定していない。
  - →結局は自分よりも身分が上のロチェスターと結婚し、都合よく遺産も相続する。

このように身分違いの人と結婚するなど、当時の時代背景の中では中々見られなかったであろう展開が意外性をもたらし、興味深い作品だと感じた。

個人的には初めて見た方の『ジェイン・エア』の方がキャストの力量や場面の見せ方が魅力的に感じたので好みである。

ただ映画を眺めるだけにとどまらずその作品の裏側を考察しながら見るといっそう楽しめると感じた。